



60年ほど前の初代・鋭一郎さん(右)と二代目・晋治郎さん(左)。

五日朝八時東京地方裁判所検事局滝川検事は予審判事、特別高等両課員二名と共に自動車を駆って豊多摩刑務所に急行し、同所に収容されている彼の軍隊赤化の石黒鋭一郎の配下数名を引出し警視庁に伴れ行き(後略)

長野出身の鋭一郎は、上京後、社会運動に身を投じていた。明治時代、急速に資本主義社会へと変容していく日本はまさに混乱の最中であつた。農産物の価格が暴落し、多くの農民が没落。紡績業や製糸業が盛んになり、工場には全国から農民の子女が大挙して押し寄せた。彼らは過酷な労働環境の下、低賃金で働かされた。やがて、この状況を改善しようと労働運動が巻き起こる。ストライキや抗議運動が頻発し、政府は集会や言論に対する取締りを厳しくした。労働者の不平不満はさらに募り、一切のヒエラルキーを無用と考える「無政府主義」や、資本主義が克服されて労働者による統治が起

ると考える「社会主義」が台頭した。無政府主義に傾倒していた鋭一郎は、政府の弾圧によって投獄されたのだつた。それから3ヶ月後の9月1日、関東大震災が発生。震災後の混乱に乗じて朝鮮人や無政府主義者、社会主義者が暴動を企んでいるというデマが流れ、鋭一郎は再び収監された。

八日の夜十二時過ぎ一人の高等係の巡査が監房にゐた自由人社の平岩巖君を呼び出して行きました。(中略)平岩君が監房へ入つて来たのを見ると 衣服はポロポロに裂け、腕を折られた様子で身体中に負傷して居りました。すると直ぐ石黒鋭一郎君が呼び出され、前同様三十分の物凄く殴ぐる音に投げ倒す地響きが続きました。『官憲ノ検束者ニ対スル暴状』(自由法曹団団報・第49号)

その後も鋭一郎はさまざまな組織に属しながら、理想の社会を追求した。彼は「辞典のようだ」と



1.上空から見た石黒家。中央の赤い屋根が住居、左上にホロホロ鳥の鶏舎、右下の赤い屋根が燻製を製造する加工場。昔は田んぼだった大きな池がある。2.三代目・石黒幸一郎さん。3.初代・鋭一郎さんは松林だった土地を開墾して開拓者となった。彼の文字が刻まれた石碑。

東北の名湯の一つ、花巻温泉。「歓迎花巻温泉」と書いた大きなアーケードをくぐると、次々と巨大なホテルや旅館が現れる。そのままずっと奥へ進むと、鬱蒼とした山道に変わる。心細くなるような気持ちを抑えてさらに進むと、舗装された道路の終わりに「石黒(いしくろ)」という看板が現れた。坂を下ると、右手に大きなお屋敷と、目の前には広大な池が広がる。池の周りには松の木やツツジの生垣が配置され、奥にある山までもがこの庭の一部のように見えた。さぞや岩手の名家なのだろうと思つて聞くと、「爺ちゃんが戦時中に疎開してきたんだよ」と、三代目である石黒幸一郎さん(53)が教えてくれた。

初代・石黒鋭一郎

花巻の山奥に入植した「石黒鋭一郎」の名を、大正12年(1923年)6月6日の大阪朝日新聞に見つけることができる。